

特集I 2020年映画ベスト3 編集部

2020年4月、映画館の灯が消えました。新型コロナウイルス感染症拡大で、全国に緊急事態宣言が出されたためです。

家のテレビで映画を見ながら過ごした2ヶ月間は、大変さびしいものでした。「映画館で映画を観る」ということが、いかに贅沢ですばらしい体験であったかということを感じました。

客足が途絶えた映画館側も、大変な危機に陥りました。規模の小さいミニシアターは、固定費の負担が重く、廃業をも覚悟するほどの苦境でした。「映画館をなくしてはいけない」。映画監督や俳優たちの呼びかけで、いくつものクラウドファンディングが作られました。映画関係者や映画ファンたちの結束と熱い思いが、多くの映画館を支えてきました。

そして、映画館の灯は復活しました。5月下旬から映画館での上映が再開され、私たちは大スクリーンと大音響で映画を観ながら、コロナで傷ついた心を癒しました。

新たに公開された作品は大幅に減ってしまいましたが、それでも優れた作品はたくさんありました。例年は、寄稿者の皆さんに日本映画の作品賞や個人賞を選んでいただいていたのですが、今年は日本映画、外国映画を問わずベスト3を選んでいただきました。結果は以下の通りです。新聞社、雑誌等によるベストテンとは一味違う結果となりました。

- | | |
|---------------------------|----|
| 1位 『朝が来る』 | 4票 |
| 2位 『三島由紀夫VS東大全共闘 50年目の真実』 | 3票 |
| 3位 『スパイの妻』 『パラサイト 半地下の家族』 | 2票 |

「2020年映画賞等一覧」「映画界総括」に続き、寄稿者の皆さんの「推し映画」コメントです。どんな苦境にあっても、映画を観ることをやめない人々による愛と執念のベスト3、ご堪能ください。

2020年 映画賞等一覧

アメリカアカデミー賞(2020年2月)

作品賞、監督賞、脚本賞、国際長編映画賞

『パラサイト 半地下の家族』ポン・ジュノ

主演男優賞 ホアキン・フェニックス

『ジョーカー』

主演女優賞 レネー・ゼルウィガー

『ジュディ 虹の彼方に』

助演男優賞 ブラッド・ピット『ワンス・アポン・

ア・タイム・イン・ハリウッド』

助演女優賞 ローラ・ダーン

『マリッジ・ストーリー』

カンヌ国際映画祭(2019年5月)

パルムドール

『パラサイト 半地下の家族』

監督賞 ジャン＝ピエール&リュック・ダルデン

ヌ『その手に触れるまで』

男優賞 アントニオ・バンデラス

『ペイン・アンド・グロリー』

女優賞 エミリー・ビーチャム『リトル・ジョー』

キネマ旬報賞

作品賞ベスト3

日本映画 ①『スパイの妻(劇場版)』黒沢清

②『海辺の映画館―キネマの玉手箱』

大林宣彦

③『朝が来る』河瀬直美

外国映画 ①『パラサイト 半地下の家族』

②『はちどり』キム・ボラ

③『燃ゆる女の肖像』

セリーヌ・シアマ

監督賞

大林宣彦

『海辺の映画館―キネマの玉手箱』

主演男優賞 森山未來『アンダードッグ』

主演女優賞 水川あさみ『喜劇 愛妻物語』

助演男優賞 宇野祥平『罪の声』

助演女優賞 蒔田彩珠『朝が来る』

新人賞

モトローラ世理奈『風の電話』

奥平大兼『MOTHER マザー』

毎日映画コンクール

日本映画大賞

『MOTHER マザー』大森立嗣

日本映画優秀賞

『アンダードッグ』武正晴

外国映画ベストワゴン賞

『パラサイト 半地下の家族』

監督賞 河瀬直美『朝が来る』

男優主演賞 森山未來『アンダードッグ』

女優主演賞 水川あさみ『喜劇 愛妻物語』

男優助演賞 宇野祥平『罪の声』

女優助演賞 蒔田彩珠『朝が来る』

新人賞 上村侑『許された子どもたち』

佳山明『37セカンズ』

田中絹代賞 梶芽衣子

報知映画賞

作品賞

邦画 『罪の声』 土井裕泰

海外 『T E N E T』 テネット

クリストファー・ノーラン

監督賞

河瀬直美 『朝が来る』

主演男優賞

小栗旬 『罪の声』

主演女優賞

水川あさみ 『喜劇 愛妻物語』

助演男優賞

星野源 『罪の声』

助演女優賞

蒔田彩珠 『朝が来る』

新人賞

服部樹咲 『ミッドナイトスワン』
宮沢氷魚 『his』

アニメ作品賞 『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』
外崎春雄

特別賞

『三島由紀夫VS東大全共闘 50
年目の真実』 豊島圭介

ヨコハマ映画祭 (日本映画のみ対象)

ベスト3 ① 『海辺の映画館—キネマの玉手箱』

② 『喜劇 愛妻物語』 足立紳

③ 『浅田家!』 中野量太

監督賞 城定秀夫 『アルプススタンドのはしの方』

主演男優賞 二宮和也 『浅田家!』

主演女優賞 水川あさみ 『喜劇 愛妻物語』

助演男優賞

宇野祥平 『罪の声』
緒形直人 『もみの家』

助演女優賞

蒔田彩珠 『朝が来る』

新人賞

森七菜 『ラストレター』
藤原季節 『佐々木、イン、マイマイン』
宮沢氷魚 『his』
小西桜子 『初恋』

審査員特別賞

細川岳と『佐々木、イン、マイマイン』

ヨコハマ映画祭大賞

大林宣彦 大林恭子

映画秘宝

ベスト

① 『フォードvsフェラーリ』
ジェームズ・マンゴールド

② 『パラサイト 半地下の家族』

③ 『ミッドサマー』 アリ・アスター

⑬ 『海辺の映画館—キネマの玉手箱』

⑳ 『スパイの妻 (劇場版)』

㉘ 『アルプススタンドのはしの方』

トホホ

① 『キャッツ』 トム・フーパー

② 『デッド・ドント・ダイ』
ジム・ジャームッシュ

③ 『T E N E T』 テネット

④ 『Fukushima50』 若松節朗

⑦ 『STAND BY ME ドラえもん2』
八木竜一・山崎貴

⑦ 『犬鳴村』 清水崇

映画芸術 (日本映画のみ対象)

ベスト3

① 『れいこいるか』 いまおかしんじ

② 『37セカンズ』 H I K A R I

③ 『アルプススタンドのはしの方』

ワースト3 ① 『スパイの妻 (劇場版)』

② 『罪の声』

③ 『ミッドナイトスワン』 内田英治

2020年映画界総括

編集部

韓国映画『パラサイト 半地下の家族』が、アメリカアカデミー賞で作品賞他4冠、カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞。ポン・ジュノ監督独特のとぼけた中に毒のある味わいで格差社会を描き、巧みなストーリー、個性的なキヤラクターの魅力もあつて大ヒットした。

クリストファー・ノーラン監督の『TENET テネット』は、本国アメリカではいま一つの興行成績だったが、日本では大ヒットした。難解な世界観は一度の鑑賞では読み解くことが難しく、何度も映画館で鑑賞したくなる魅力を持った映画だった。

リピーターといえば『ミッドサマー』。当初公開版は、R15指定で2時間半のバージョン。独特の雰囲気を持ったホラー映画ということで大きな話題を呼び、公開後1カ月もたたずにR18指定3時間のディレクターズカット版が公開された。コロナで映画館が閉まる直前だったが、若い女性のリピーターが映画館に詰めかけた。

アカデミー賞で作品賞の有力候補と言われていた『ストーリー・オブ・マイライフ わたしの若草物語』『1917 命をかけた伝令』も、昨年日本で公開されヒットした。主

演級の女優ばかりで構成された家族が、スクリーンに登場するワクワク感を味わえる『ストーリー・オブ・マイライフ』、『戦場を駆け抜ける主人公と120分間同化する』『1917』、ともに魅力的な映画だった。

巨匠の新作映画としては、ダルデンヌ兄弟『その手に触れるまで』、『ケン・ローチ監督『家族を想うとき』、テレンス・マリック監督『名もなき生涯』、ロイ・アンダーソン監督『ホモサピエンスの涙』などが公開された。いずれも監督らしさあふれた作品で、ファンの期待に応えた。

女性監督の躍進も目立った。セリーヌ・シアマ監督『燃ゆる女の肖像』は、カンヌ国際映画祭で高評価を得、日本でもヒット。ルル・ワン監督の『フェアウェル』は、桑名市出身の女優が出演していることも話題をよんだ。韓国映画『はちどり』、『82年生まれ、キム・ジョン』、『チャンシルさんは福が多いね』の3本も女性監督作品。女性の生きづらさを描いた作品は、日本でも多くの共感を呼んだ。

日本映画界の明るい話題といえば、アニメ『鬼滅の刃』。シネコンの全スクリーンを占領するほどの大ヒットとなり、『千と千尋の神隠し』を抜いて歴代興行収入のトップになった。他にも素晴らしい作品が公開されたが、それらについては皆さんの愛情こもった寄稿にお任せしよう。

①『スパイの妻』(劇場版)

(黒澤清) 日本

②『朝が来る』

(河瀬直美) 日本

③『MOTHERマザー』

(大森立嗣) 日本

①『スパイの妻』は、サスペンス映画のような展開になっていて、観る者を見飽きさせない映画作りをしている。NHKBS8Kドラマ版は観ていないが、セットもよく整えられ、ディテールも行き届いていて時代の空気がよく出ていると感じられた。カーテンが揺れるシーンなど、細部にこだわりを持って撮られているのもよかった。蒼井優が夫に翻弄されながらも、騙し合いをするという役どころをうまく演じていたが、演劇のようなセリフ回しについてだけは少し気になった。ラストは観る者の判断にまかせるセンスのいい幕切れで、いろんな解釈ができ、余韻を残すものになっている。映画作りが巧みな作品であった。

②『朝が来る』は、河瀬直美監督作品。映像で語ってゆく作り手であり、好き嫌いが分れることが多かったが、今回の作品は、特別養子縁組という題材のせいか、物語としてカッチリ仕立て、多くの人に共感を呼ぶような作り方になっている。一方で、心象風景を自然で描写したり、時に応じてドキュメンタリータッチにしたり、光の部分

と影を感じさせる部分とを取り入れるなど、河瀬流の撮り方も健在。ときどき息が詰まるような場面になっても、美しい映像と自然の音とでひと息つけるような作り方も巧みだった。ラストに希望を感じられるのが救いになっている。

③『MOTHERマザー』は、大森立嗣が制作しているが、おそらく『万引き家族』とどことなく似ていると感じる人が多いのではないだろうか。埼玉で実際に起きた事件に着想を得た、いわゆる毒親と息子の共依存関係を描いた作品。一言で言うところ胸糞の悪い映画。嫌悪感とか無力感とかさまざまな感情を喚起するが、見終わった後にはやり場のない気持ちかもやもやと残ることとなる。常識では推し量れない母親と息子の絆は名状しがたくもリアルである。長澤まさみがこの母親を熱演して、これまでのイメージを脱却、新境地を見せている。

以上が、筆者の2020年の日本映画ベスト3であるが、本誌別稿の「私的な素敵なシネマ2020」とは異なるものとなっている。ベスト3は個人的にはあっても、優れた作品という意味で選定しているが、一方の「私的な素敵なシネマ2020」については、私的にお気に入りとなった映画についてあげているからである。

①三島由紀夫VS東大全共闘

50年目の真実 (豊島圭介) 日本

②二人ノ世界

(藤本啓太) 日本
(河瀬直美) 日本

③朝が来る

①この映画は圧倒的な迫力で五十年前を蘇らせてくれる。私の大学入学直後の時代の出来事だ。この映画を見て五十年前の大学紛争の頃、皆が熱く真剣に考え議論していたことを思い出した。当時マスコミに刷り込まれ、私は「三島は危険人物」という印象を強く持っていた。しかし、この映画を観ると真逆で学生たちに真摯に向き合い誠実に話し合おうとする三島の姿を映像が映し出している。また熱量も凄い。一方全共闘側は礼儀正しく真面目な討論者もいるが、三島の気迫に押されてか不遜な態度で押し通したり、観念的な言葉に終始する者も多い。冷静に見れば大人と子どもの討論だ。三島が「諸君の熱情は信じる」と言っているが、そんな熱い時代だった。全共闘・楯の会双方の参加者たちの当時の話と現在からみた評価は大変興味深かった。何人かに解説・評論役をさせていたが、個人のイデオロギーが入りやすく不要だ。

論より映像だ。ドキュメンタリー映像の威力の凄さを知ったが、映像はプロパガンダにも使われやすい。見る側には見分ける力が必要だ。

②首から下マヒの障がい者俊作（永瀬正敏）と全盲の彼の介護ヘルパー華恵（土居志央梨）を描くラブストーリーの傑作である。冒頭には生きる気力を失った俊作が介護ベットから無造作に見上げた天井を映しですが、ラストでは介護ベットで寄り添う二人を天井から撮りズームアウトしていく。華恵の献身的な介護で、頑なな俊作が次第に心を開いていく描写は素晴らしい。一方、すべてを失い自暴自棄になった華恵への俊作の不器用だが心の底から発するプロポーズは心に残る言葉だ。劇中障がい者が健常者から差別される様子を巧みに挿入し観客に俊作たちの気持ちを感情移入させる。この映画は若き京都芸術大学の学生・OBたちが永瀬正敏の協力で完成させ、数年間を経て二〇二〇年に公開された。若者たちが作った映画の質の高さに驚いた。

③特別養子縁組に関わる三人の母たちを描いたヒューマンドラマの秀作である。河瀬直美監督は初期の作風と違い、『あん』同様に少数の弱者に光を当て愛情を持ちながらわかりやすく語っていく。「産みの親」（蒔田彩珠）と

「育ての親」（永作博美）の現在と過去とを頻繁に交差させながら、子どもの存在で不幸から幸福に、幸福から不幸に転ずる姿を描いていく。この映画の素晴らしい所は、河瀬監督が主人公たちの心に寄り添いながら丹念に誠実に描いているので、観客が知らず知らずに主人公たちに同化していきることだろう。また河瀬監督らしく風の子よぎ方、太陽と雲の動き等自然を場面転換に絶妙に用いその後の展開を暗示し補完する。一方、出産準備と縁組を受け持つ仲介者（浅田美代子）、いわば「第三の母」の過去は省略され彼女の苦難の過去を観客の想像に委ねる巧みさも見事だ。三女優の好演を引き出した河瀬監督の演出が光った。

池村英子 津のナチュラリスト

①パラサイト 半地下の家族

（ポン・ジュノ）韓国

②朝が来る

（河瀬直美）日本

③浅田家！

（中野量太）日本

①「ヒッチコックの映画ですか」って聴きたいほどに、怖くて、恐ろしくて、「もう二度とこの映画は観たくない」

って思いました。

貧困層と富裕層の格差。色々と複雑な事情もあるだろうが、ちょっと残酷すぎませんか。これは映画の世界だけであってほしいと願いました。

②一人の子供が特別養子縁組によって、新たな家庭の子供として育っていく。産みの親と、育ての親。この複雑なテーマに、またもや河瀬監督は挑戦した。

『あん』で、今は亡き樹木希林を主演させたが、その希林の親友浅田美代子が重要な役で登場する。永作博美、井浦新、浅田美代子が好演する。

見終わった後、後味の良い、何故か清々しい気持ちになっていた。また一つ腕を磨かれた河瀬監督。難題なテーマを、柔らかに作り上げていた。

③津市出身、写真家「浅田政志の家族」の実像に迫る作品。

高田本山専修寺や、津市がロケ地となって登場する。

二宮和也、妻夫木聡、黒木華、風吹ジュン、平田満、芸達者が顔を揃える。コロナ禍の中、外出制限の多い中、改めて家族の役割を見つめ直す。浅田家見習って、楽しい家族写真を撮る人も出てくるかもしれない。

ほんわかと心温まる作品、家族の絆が力強い。津市民にとっては、ありがたい作品。

太田 義幸 通りすがりの映画好き

①三島由紀夫VS東大共闘

50年目の真実

(豊島圭介)

日本

②悪人伝

(イ・ウォンテ)

韓国

③ザ・プロム

(ライアン・マーフィ)米国

あらためて2020年に観た映画を並べてみると、これが今年のマイベストって言える作品がないなあと。これは新型コロナウイルス感染症の影響で多くの作品が上映延期となった影響なのか、私の感性や鑑賞選択眼が乏しかったからなのか。ベストと感じた作品がないので、順位付けなしで3作品を挙げさせてもらいます。

- ①三島由紀夫を論破しよう!と900番教室に集まった千人を超える東大生。三島の意見や作品に対して批判を述べる。三島はそれに対して、とても丁寧な受け答えしている。しかも、三島なら東大生を論破できただろうが、学生の意見に対して批判をしなかった。その意見を受け止めたうえで真摯に対応していた。三島がとてもジェントルマンに見えた。
- ②サイコ・キラーに刺されても死なない男の役もマ・ドンソクが演じれば説得力がある。暴力組織のトップの役からであり悪人なんだろうが、あまり嫌悪感がないのは、

彼が今まで演じた役がらが、普段は腰が低くて控えめだが、いざとなると無茶苦茶強くて優しいという人物像が私に刷り込まれていたからなのか。

- ③LGBTを扱うが、基本的には王道ミュージカル。嫌な奴も最後は心を入れ替えて良い奴になって大団円に。コロナ禍で日常生活に我慢が必要なので、歌って踊って最後はハッピーになる映画を望んでいたのかな。

中村藤生 スタッフ

①パラサイト 半地下の家族

(ポン・ジュノ)

韓国

②シチリアーノ 裏切りの美学

(マルコ・ベロッキオ)イタリア

③三島由紀夫VS東大共闘

50年目の真実

(豊島圭介)

日本

昨年は年初からコロナの中、入院準備と手術、自治会活動で映画から離れていた。少ない作品の中で興味深かった3作品とした。

- ①なんとといっても『パ・半地下の家族』のエンターテイメント力は突出している。過去の作品を観返したが、『海にかかる霧』以外はどれも面白すぎるし、それぞれ特質を孕んでいるのがすごい。

②『シ・裏切りの美学』は好きなイタリア映画であり、監督がマルコ・ベロッキオ、おもわず引込まれた。2016年同監督の『甘き人生』以後に観た作品。ひとりの人間の固有性を掘り起こすのが巧い。シチリア島生まれのマフィア、ブシエッタがシチリアマフィアの抗争と絶滅を狙った実話の映画化。ブシエッタは判事の力を利用して組織「コーザ・ノストラ」を守り、自己の誇りを矜持しようとする。ブシエッタ役の男優は魅力的。静かな抑えた演技が光る。「ゴッドファーザー」的な展開と異なり両マフィアの裁判シーンが長い異色作。司法とマフィア組織の権力（共同幻想）のもたれあい、殺し合いに苦悩する。

イタリア映画を観るとき、イタリア映画史の流れと過去の作品が潜在的背景になっている。余談だが、本作監督のベロッキオは同時期に増村保造がイタリア留学したローマ国立映画実験センターで学んでいる。

『罪の声』 (土井裕泰)日本

植田沙織 むぎのえいが部

2020年度映画ベスト3を上げるといってお題に対して、私は2020年ほとんど映画館で映画を見ていないことに

気がつきました。2021年はもう少し意識的に映画館に足を運ぼうかなあ。

ベスト3は選べない状況ですが、1作品上げるとしたら『罪の声』です。星野源が好きな私に、友人から誘いがあり、本作品を鑑賞しました。犯罪に自分の声を使われた子供(星野源)が成長して、記者(小栗旬)とともに事件の真相に迫るといってお話です。同じ事件に巻き込まれながら、かたやその事実を知らずに成長して家庭を築き幸せに暮らす主人公と、一生事件に振り回されなければならなかった人物の人生が平行に描かれることで、ある人にとっての“正義”が犯罪となり、他人の人生を変えてしまうことがあるのかと考えさせられました。何気なく観た作品でしたが、心にぐっとくるものがありました。

映画館でどんな風にストーリーが続くんだろうと引き込まれながら鑑賞した2時間。エンドロールで脚本に“野木亜紀子”さんの名前を拝見した時、とても納得しました。星野源好きとして“逃げ恥”“MIU404”と野木さん脚本作品を観て、とても好きな脚本家だったので。スピード感あるストーリー、最後までストーリーがどう進むかわからない面白さ、野木さんの今後の作品に注目したいとも感じたのでした。

①タイトル、拒絶 (山田佳奈 日本)

②チイファの手紙 (岩井俊二 中国)

③朝が来る (河瀬直美 日本)

コロナ禍で上映作品も少なく、いつもの年のように、どれを選ぼうかと迷うことはなかった。この3本は頭一つ抜きん出ていた。

①デリヘル店の控室で繰り広げられる群像劇。過激なセリフが飛び交い、風俗の世界の舞台裏が赤裸々に描かれている。性産業でありながら男と女の裸のからみシーンはほとんど見せない。その必要がないぐらいデリヘル嬢一人一人にドラマがあり、夫々単独でも一本の作品として成り立つ濃さを持っているからだ。義父から性被害を受けながらも、たくましくデリヘルで生き抜く女、ダメ男に一途に寄り添うダメ女、上司の女房に買われる店の男。ほとんど知らない俳優たちだが、適材適所のキャストイングで素晴らしい。

狭い空間の中で繰り広げられるセリフ劇でもあり非常に演劇的だと思ったら、2013年に舞台上で上演されている。その時の舞台演出と主演もこの映画の監督山田佳奈が、手掛けているのだ。戯曲をベースに周到に練り上げ

たであろう脚本も秀逸。

②『ラストレター』の日本版が封切られて約半年後、同監督による『チイファの手紙』という中国映画が封切される。なんとこの『ラストレター』と全く同じ筋書きで、2年前(2018年)に中国で撮った作品だという。どうやら、岩井は同じ作品を文化や風土の異なる国で撮りたいと思っていたらしい。この中国版がいい。ストーリーに膨らみがあり、国内版を凌駕している。国内版は割とサラッとした爽やかなラブストーリーになっているが、中国版は母を自殺で亡くした喪失感が、残されたものに重くのしかかっている。優秀で美女、無限の可能性を秘めていた少女が、母となって無残な最期を迎えようとは、誰もが思いもしなかったことだろう。そんな容赦のない出来事が中国の風土を背景に映し出される。そして、終盤、亡くなった母と瓜二つの初々しい彼女の娘と会った元恋人の男は作家として前に進もうと決意し、一方、待ち焦がれていた生前の母の恋人に会えた少女は、モヤモヤしていたものが吹っ切れ生きて行こうと決意する。この出会いのショットは理屈抜きで感動を呼ぶ。私はこの時になって、ふっと、東日本大震災を思い出した。岩井は被災地の仙台出身だ、震災に深くかわり、全国で歌われている「花は咲く」の詩も作っている。突然の大津

波に襲われ多くの人たちが理不尽に犠牲になった。残された連れ合いの、家族の、恋人たちの鎮魂の思いをこのラブストーリーに置き換えて作ったのではないか。そう思えて来た。

③正直にいうと、河瀬直美は大嫌いな監督だった。あの日本人でも読むのが難しいタイトルを並べて、日本人が見ても違和感のある独りよがりの作品には辟易していた。しかし、2015年の『あん』あたりから印象が変わって来た。そして、この『朝が来る』だ。彼女は確か数年前に子供が出来たと聞いている。撮る世界観も広がって来たのではないか。前半は不妊治療のドキュメンタリーを見ているようだったが、後半に入るとガラリと様相が代わり、グイグイ映画の中へ引き込まれていく。とりわけ、蒔田彩珠の生みの親と永作博美の育ての親との新旧の女優が対決し火花を散らすシーンは迫力があつた。河瀬は自然の描写がうまい。特に刻々と変化する海景色が素晴らしい。そんな自然に囲まれて、主人公に生きていくこうとする力が湧いて来たとしても不自然ではない。その他LGBTのマイノリティの世界をリアルに描いた『ミッドナイトスワン』、阪本ファミリーの老優たちが、演ずるといふよりは遊んでいる楽しいハードボイルド作品『一度も撃ってません』などが印象に残った。ただ、残念

なのはコロナ禍で外出の制約があり、『アンダードッグ』劇場『無頼』等、話題作を見逃してしまったことだ。なんともフラストレーションの残る年であった。

藤田明 映画評論家

日本映画

① i — 新聞記者ドキュメント — (森達也)

② れいわ一揆 (原一男)

③ 海辺の映画館 — キネマの玉手箱 (大林宣彦)

① 東京公開が基準なら2019年の作だが、名古屋公開は2020年冬。コロナ下の年末年始にTVの日本映画チャンネルで接し、2020年公開の劇映画よりも上だと判断。女性記者を憎々しくさげすむ権力側の表情、映画史上でも例のない類をとらえている。劇映画『新聞記者』は内調(内閣調査室)に切り込んだが、これは記者クラブの特権性や司会進行側の連続的な妨害例に挑んだ。

② 長尺(4時間8分)にはあきれたが、山本太郎の肩を持ち、聴衆も少ないにかかわらず各地を行脚する異性装の安富歩の姿、次第に感銘を催す。母校の京大前で立看板禁止に抗する弁はその極点。東大東洋文化研究所だと現職の

まま立候補も可能なのだろうか、との疑問は抱いたが。

「映芸」ベストテンでは誰も投じておらず、「キネ旬」文
化映画ベストテンで9位に滑り込んでいる。

③弱点だらけ。もつと良くなるはずとも思うが、病を押し
ての大林の最終作。結果はともかく、意図は強固。戦中
派とも言える自分を振り返って共感点は少なくない。

以下を添えるなら、『スパイの妻』は戦中なのに渡米望
む主人公。その構想の荒唐無稽さは、作り手の戦時に対
する学習不足からだろう。『朝が来る』の中に類型表現が
目につくのも困りもの。大きなおなかを触り合う女たち
の場面はよかったが、『浅田家!』は見ている間は面白か
ったものの、あとに残るものが皆無。家族ファーストの
あり方に一矢も放てない辺りも疑問符。『三島由紀夫 v s
東大全共闘』はまとまってはいるが、今日的な波に乗る
知的タレントのコメントで終始させた点が不満。当時の
駒場で立場の違っていた教師や、私学系全共闘のどろど
ろした体験者の回想を相対的に含めるのでなければ。東
大しかご存じない監督の了見の狭さが、せつかくの記録
映像を「開かれた」形にはできなかつたわけだ。問題へ
の新見解こそほしいところ。

外国映画

①巡礼の約束

(ソントラルジャ)

(チベット)

②グレース・オブ・ゴッド

(フランソワ・オゾン)

(フランス)

③この世界に残されて

(バルナバーシュ・トート)(ハンガリー)

①前半、四川からラサをめざし五体投地を繰り返す女性の
ありように驚嘆。中国映画というよりはチベット人監督
の内なる魂をこそ見るべきだろう。

②カトリック僧侶の少年への接近。久しぶりのオゾン監督、
成熟の極に至った。

③大戦終結の3年後の1948年、医師と15歳女性との
アパート暮らし。社会主義政権誕生とはいえ、周囲では
連行が続く。それによる不安が片方にあり、もう一方で
は青春への目覚めも。戦中の問題が軸かと予想していた
ら、その辺はごくわずかで、多くは戦後の現実。ラスト、
51年になりスターリンの体調悪化情報が入り、静かに
微笑む女性をとらえて映画は終わる。日を経ても甦って
くる作。家族ファーストなどを引き離す「連帯」の第一
歩がここにはあった。

次点は中国の『在りし日の歌』。『パラサイト:』は10
位にしようか。邦・洋画ともコロナ下でなおのこと、大都
市と地方の格差を痛感させられる1年だった。

①初恋

(三池崇史 日本)

②スパイの妻(劇場版)

(黒沢清 日本)

③ドロステのはてで僕ら

(山口淳太 日本)

2020年は例年以上に観たい作品が上映されなかったが、それでも記憶をたどると割と映画館に足を運んでいた。2020年中に公開された作品は半分ほど。その中から特に印象に残った3本を選んだ。鑑賞順。

①三池監督の最高傑作。シナリオが素晴らしい。緩急の切り替えが絶妙。いつもの三池節炸裂も「初恋」が見事に描かれたロマンティックな作品。

②黒沢監督のために教え子達を書いたシナリオの事実に基づく部分とフィクションのバランスが黒沢監督の演出手法を心得ていたのか、まさに「お見事！」と膝を打ちたくなるエンターテインメント作品。

③ワンカットっぽく仕上げた映像が全編iPhoneのみで撮影されたというから驚く。ヨーロッパ企画お得意の風呂敷をたたむかのごとく伏線の回収が見事にはまって爽快。初長編作品というのが意外。

①リチャード・ジュエル(クリント・イーストウッド) 米国

②シカゴ7裁判

(アーロン・ソークン) 米国

③はちどり

(キム・ボラ) 韓国

①クリント・イーストウッド監督の演出の巧さにはいつも頭が下がるのですが、今回も、拍手したくなるような秀作。シナリオがいいのですが、演出、完璧。

主人公がお人好し過ぎてハラハラ、サム・ロックウェル扮する弁護士がユニーク、女性3名(母親、記者、秘書)の惹きつける演技・・・本当に素晴らしい！

②60年代アメリカで実際にあった裁判を描く劇映画ですが、反戦、弾圧、人種差別など重いテーマにも関わらず、ストーリーが面白いのと、登場人物が皆個性的で存在感があり、とても惹きつけられました。

まさにこれぞ映画！裁判劇の面白さを満喫しました。
③主人公の14歳少女が家族や学校、友達の中で持つ不安や違和感が痛いくらいに伝わってきました。韓国の90年代の社会的事件や事故が、主人公の孤独や心の成長と関連付けて描かれているのが、この映画の素晴らしいところですよ。

日本映画

村上 暁 スタッフ

① 37セカンズ (HIKARI)

② ミセスノイズィ (天野千尋)

③ 風の電話 (諏訪敦彦)

① 脳性麻痺の女性を描く。冒頭、監督の強烈な意志、映画に対する覚悟と責任を感じた。主演は、自身も映画の登場人物と同じ障害を持つ、映画初出演の佳山明。クマさんと呼ばれる男性も、『パーフェクト・レボリユーション』で主役のモデルになったご本人。俳優ではなく、障害を持つ人を起用し、しかもきちんとした演技にしている監督の手腕は素晴らしい。母親役の神野三鈴も素晴らしい。小さな靴を持つ表情が忘れられない。パンフレットには、主役の佳山さん、母役の神野さんの言葉が掲載されている。親子を演じる俳優同士、相手に対する気持ちが綴られていて感動的だった。『パーフェクト・レボリユーション』では主役が男性だったが、『37セカンズ』では障害を持つ女性の性を扱っている。脚本もとても良くてきていて、全体の完成度としても、初めての長編とは思えないほど素晴らしい映画だった。

② 騒音おばさんを描いた映画だということは分かっていたけど、思っていたのとは違う展開になる。脚本が素晴らしい。キャストが無名でも、物語の力があれば十分に素晴らしい映画ができることを証明している。子役の演技も素晴らしいかった。

映画の最終盤、主人公が自分の行動を反省し、夫に謝る場面がある。夫は黙して語らない。最も反省すべきは夫なのに。これは監督の我々に対するメッセージなのだと感じた。反省すべきことに気づくことすらできない男。映画の世界も現実の世界も、そんな男でいっぱいなのだと。

③ 『ライオンは今夜死ぬ』の諏訪敦彦監督。東日本大震災で家族を失ったハル。ベルに促されて乗ってしまった電車で故郷を目指す。旅の途中、ハルはいろんな人と出会う。それぞれが悲しみを抱えている。世界には不条理な悲しみが溢れている。ハルの出会いに心を揺さぶられるが、監督のコメントにもある通り、感動と言っていないのか悩む。生きるということについて考えさせられた。主役のモトーラ世理奈のすごさ。ほぼアドリブ、超長いカットの中で、凄まじいリアルさで存在していた。ラストシーンも圧巻。

外国映画

① オフィシャル・シークレット (ギャヴィン・フッド) 英国

② 君の誕生日 (イ・ジョンオン) 韓国

③ 屋根裏の殺人鬼フリッツ・ホンカ(ファティ・アキン) ドイツ

① イギリスが舞台。女性諜報員が、イラク戦争に関する国家秘密をリークした、実際の事件を元になっている。主役のキーラ・ナイトレイが、イラクとの戦争に前のめりになる米英首脳に怒り、アメリカの汚い手段を公表しようとする。記者ヘリークした後、自身の法律違反や移民である夫への影響の大きさにおびえる様が、とてもリアル。この映画は、主人公のセリフの一つ一つが本当に素晴らしい。「政府に仕えるのではない、国民に仕えるのだ」「戦争が起これば、フセインだけではなく無辜の民も死ぬ」。組織の中で働く身として、自分も同じように言えるだろうかと考えさせられる映画だった。信念のこもった強い言葉以外にも、夫や友人に漏らす弱音、弁護士に漏らす不安な気持ちなど、全ての言葉に感動した。

② 2014年に韓国で起きたセウォル号沈没事件。高校生の息子を事故で亡くし、残された両親、妹家族を描いた作品。120分間、心を揺さぶられ続ける。事件当時、

事情があつて父親は海外にいたという設定が非常に生きている。妹が海を怖がるシーンあたりから、もう家族の一員としてしかスクリーンを見られなかった。クライマックスの誕生日会が素晴らしい。まさにドキュメンタリー。劇映画とは思えないリアルさで、胸に迫ってきた。監督は、ボランティアをしながら遺族と長い年月をともにした。映画の中で起きることは、ほぼ遺族たちが経験した事ということで、それが映画の力となっている。女性監督の長編デビュー作。今後が楽しみ。

③ 1970年代のドイツが舞台。実在の連続殺人犯フリッツ・ホンカを描く。登場人物や映画の舞台となるホンカの部屋、居酒屋など、何から何まで強烈。園子温監督の『冷たい熱帯魚』を思わせるけど、死体をギーコギーコは映されない。その代わり、ホンカの動機が金でないだけに、世にもおぞましいベッドシーンを楽しめる。全体を通して悲惨な場面が続くが、ホンカの妄想や契約書など、笑えるシーンもある。それにしても、あの女優さんたちはどこから見つけてくるのか。社会に見捨てられた人々を、見事に体現していた。ホンカ役の役者さんが20代のイケメンというのにも驚き。ファティアキン監督のセンスは素晴らしい。